

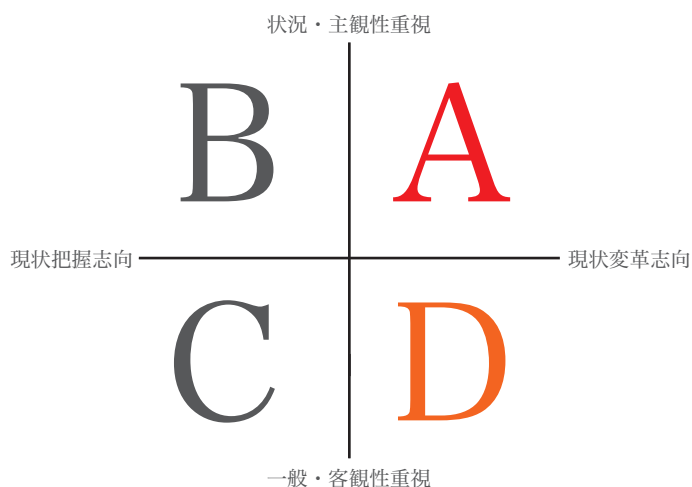
# 社会科学授業研究の 語りを 拓く



2017.3.18. (SAT) 13:00-17:00

大阪大学中之島センター (406多目的室・402講義室)

大阪市北区中之島4-3-53



「なぜ社会科学授業の研究をするのですか？」という問いに対して、私たちの多くは「今の社会科学の授業をもっといいものにしていきたいから」と答えることでしょう。それは、私たちが実践者でもありながら研究を行なうときの、おそらく、今も昔も変わることのない「原点」でした。

その意味で、「どうなっているのか？」という「現状把握」を問いの起点にする従来の心理学や社会学の研究とは異なり「社会科学教育研究」は常に「どうしたらいいのか」「どうしていけばいいのか」といったように、現状を変えていきたいという「現状変革」の志向が強い研究分野だったと言えます。

それは、今も昔も、たぶん未来においても変わらない「原点」だといえます。ところが、今日、さまざまな脈絡の中で、「研究のあり方」の視点が変わりつつあります。

学校や地域状況や子どもたちの状況、教員の状況の多様化によって「一般的な現場」が想定しづらい社会になってきました。

また、「研究」そのものも大きな変化がおり、社会的構成主義の勃興によって「一般性・客観性重視」という認識論だけではなく、「状況性・主観性」を踏まえた研究やその記述のありかたも重要となってきました。

いわば、社会科学教育研究は、従来「D」を志向してきたのですが、一方で、「A」の方向の可能性を志向していく必要も生まれてきています。

私たちは、「授業をもっといいものにしていきたい」という原点を大切にしながら、それをどのような「研究としての語り」にしていけばいいのでしょうか。

参加者の皆さんで、議論を深めていきたいと思えます。

第一部 実践を語る、実践を聞く

語り手 坂田 大輔 (徳島大学・元鳴門教育大学附属小学校)

第二部 ワークショップ：自分の実践を研究的に語る

第三部 総括としての「社会科学授業研究」の語りの未来と可能性

吉川 幸男 (山口大学)

全体統括 梅津 正美 (鳴門教育大学)